

西洋哲学史におけるニーチェと *Sacra Scriptura* (1)

岡崎 文明

Nietzsche and *Sacra Scriptura* in the History of Western Philosophy(1)

OKAZAKI Fumiaki

梗概

序論

- 〔一〕現代西洋哲学は自らの伝統から逃れることはできない
- 〔二〕西洋の哲学伝統に対するわれわれ日本人のスタンス
- 〔三〕これまでの発表内容の要約 (一) 存在優位性と *Etas*
- 〔四〕これまでの発表内容の要約 (二) 存在論、生命論、認識論
- 〔五〕ニーチェの *Jenseits von Gut und Böse* をテキストとして取り上げる。
- 〔六〕本稿のスタンス—宗教ではなくて「哲学」に立つ—結論の先取り。

本論

第一節

- 〔七〕*Philosophie der Zukunft* と *Vornehmheit*
- 〔八〕*herrschende Art* と *werteschaffend*, *Gott ist tot*.
- 〔九〕*Beherrsche* と *Abhängige*

- 〔一〇〕*Herren-Moral* と *gut und schlecht*
- 〔一一〕*Sklaven-Moral* と *gut und böse*
- 〔一二〕価値逆転
- 〔一三〕今日の状況

- 〔一四〕*Jenseits von Gut und Böse* 3,52 のテキスト (一)
- 〔一五〕*Genesis* (1,27-29)—人の創造①
- 〔一六〕*Genesis* (2,16-17)—人の創造②
- 〔一七〕「命の木」と「善悪の知識の木」—対立する本性
- 〔一八〕*Genesis* (2,18-23)—イシヤの創造
- 〔一九〕「名付ける」—価値創造とロゴス
- 〔二〇〕*Genesis* (3,16-20)—原罪と死、エバの命
- 〔二一〕拙稿の主張 (一)—「最初の人間」の時代と族長時代
- 〔二二〕拙稿の主張 (二)—*Mose* に始まる律法時代
- 〔二三〕拙稿の主張 (三)—*Novum Testamentum* 時代
- 〔二四〕拙稿の主張 (四)—*Übermensch* 時代

第二節

- 〔二五〕*Genesis* (22,1-13)—*Abraham* と *Isaac*
- 〔二六〕*Abraham* と *Isaac* の「最遠愛」

〔二七〕旧約の Gott

〔二八〕 *Jenseits von Gut und Böse* 3.52 のテキスト (二)

〔二九〕 *Jenseits von Gut und Böse* 3.52 のテキスト (三)

〔三〇〕 *Ad Romanos* (3.9-20) (3.21-24) の *gratia*

〔三一〕 *Liber Leviticus* (4.22-26) の律法

〔三二〕 Paulo による解釈—*Christologie*

〔三三〕 *Ad Romanos* (8.1) (12.1-21) — *ethica Christiani*

〔三四〕 Abraham と Gott の死—絶望

〔三五〕 *Vetus Testamentum* 時代の死—虚無の絶望

〔三六〕 *Novum Testamentum* 時代の絶望、mediator の結果

〔三七〕 *Jenseits von Gut und Böse* 3.52 のテキスト (四)

〔三八〕 族長時代の人間—価値創造者

〔三九〕 *Evangelium secundum Iohannem* の *logos*

〔四〇〕 mediator—*logos* の甘やかし—奴隸化・畜群化、Gott ist tot

〔四一〕 *Sacra Scriptura*—「良心に負う最大の破廉恥」「精神に反する罪」

結論

〔四二〕 未来の哲学—神亡き神学—高貴な力の神学—自然神学

〔四三〕 弱者と強者の両方の救済はどうなる？

〔四四〕 ニーチェ—「キリスト教哲学者」の一人

註

使用テキスト

参考文献

序論

「一」現代の西洋においては、哲学に一種の傾向性、つまり過去の伝統を切り捨て哲学史を無視して哲学するという傾向性が目につく。これにはそれなりの理由が見られる。西洋においては過去の力が伝統として強く作用し、その結果これが、現代西洋の思索を縛り、創造的な営みを妨げているという一面が確かにあるからである。したがって、伝統から離れて、いま目の前にある事柄・事象から出発して、これらのみを材料に思索しようとする態度が出てきたのも自然である。

しかし、二千六百年にも及ぶ哲学の伝統を受けて今日までやって来た西洋にとって、伝統が血となり肉となつて良きにつけ悪きにつけ無意識のうちにも彼らの思索に影響作用を行使している。したがって、彼らが意識的に伝統を切り捨てても、それは表面上のことであつて、決して伝統そのものから外れあるいは白紙に立ち返ることはできない。今日の西洋人はそれほどまでに自分達の長く重い伝統に生かされもし、またおし潰されそうにもなっている。

かかる状況下において西洋の伝統の中心にあるキリスト教を否定したひとりがニーチェ (*Nietzsche, Friedrich, 1844-1900*) である。

「二」ところで、われわれは極東にあつて西洋哲学を学びはじめて明治以来百二十年余を経たが、この時間の長さは西洋の哲学史のそのの二三分の一に過ぎない。したがってわれわれは西洋哲学を血とし肉とする程までには至っていない。その結果、幸か不幸かわれわれには西洋人のように西洋の哲学的伝統の拘束は無く、そこから自由である。われわれは、むしろかかる西洋の伝統を積極的に学び、これをわれわれの思索の材料に組み入れて豊かに生かしていく努力が、この一世紀余に亘つてもなされてきたし、ま

た今後もなされる必要があるのではないかと思われる。

そしてやがてわれわれは、西洋から少し離れた所で、西洋人とはまた少し違った姿で、西洋哲学の像を結び、さらには哲学そのものの別の地平を拓く可能性もまた出て来るのではないかと思われる。

こういう次第で、われわれは哲学を理解するために、西洋の哲学史的伝統を学び、自分なりに西洋哲学史全体の姿を捉えることを目指して、哲学史研究を続けてきたのである。

「三」さて、私は先に⁽¹⁾ 中世哲学に視点を取ってそこから現代哲学を見ると如何なる像を結ぶのか、これについて、その原理的なことを述べた。

これを要約すれば、まず「ヨーロッパ哲学(西洋中近現代哲学)は、ジルソンのいう「存在優位性」の思想伝統の上にある」という見方を採用した。また、この「存在優位性」における「存在」とは、中世の新プラトン主義の「存在・生・知性(認識)esse-vivere-intelligere」という「三」構造⁽²⁾をなしていた。

この「三」(trías, trias)は、本質的・実体的には同一でありながら、働き(operatio)においてはそれぞれ異なりつつも互いに含む合う三つのもの(res)を指している。これを中世におけるトマス・アクィナス(Aquinas, Aquinas, 1225-74)の「万有の根源」即ち「哲学の原理」において見、テクストに基づいてかかる「三」構造を明らかにし、かかる「三」が西洋哲学史を見るひとつの観点ともなり得ることを示した。

そして西洋中世から近現代の諸哲学は、「存在—生—知性(認識)」という「三」における各項を交互に原理にすることによって成立してきたという一つの見解を提示した。

「四」その結果、中世哲学は存在esseを原理とした「存在論・存在の哲学」を、近世哲学は知性intelligere(認識 cognitio)を原理とした「認識論・認識の哲学」を形成し、さらに現代哲学は、生(vivere, vita, Leben)を原理とした「生命論・生の哲学」と、中世とはやや違った意味で存在(esse, Sein)を原理とした「存在論・存在の哲学」を形成してきた、という見方を提示した。

しかし存在論は生命論や認識論を切り落しているのではない。存在論の中心的概念(存在)の背後には生命論と認識論が寄り添っており、また、同様に認識論にも生命論にも自余の二者が寄り添っているからである。つまり、三つは「三」構造をなしている。

なぜなら、伝統的には人間精神は神の似像(Imago Dei)とされ、現代でも無意識、無言のうちに、人間精神は神に似た「三」構造を持つており、了解されているからである。これは中世以来の伝統が現代西洋を規定しているひとつの結果であろう。

「五」さて、本稿では各論に入り、具体的に個々の歴史的実在—テクスト—を検討して、中世新プラトン主義の「三」原理が近現代哲学において実際に展開している様子を見よう。今回取り上げるのは、「三」のうちの「生vita」を原理にしたニーチェの哲学である。

中心的に取り上げる著作は一八八五から翌六年にかけて執筆されたJenseits von Gut und Böseである。⁽³⁾この第三章に「宗教的なもの」についての考察が見られる。これを手がかりにして進んで見たい。

この章を取り上げたのは、中世哲学が直にキリスト教という宗教のポジティブな影響下で成立した哲学であり、しかしまた、この宗教がニーチェにネガティブな影響を及ぼしたと思われ、したがって中世哲学からこれを見ることができると思われるからであ

る。

「六」ただし拙論では哲学の立場に立つてこれを扱うのであり、宗教の立場に立つてではない。宗教と哲学はなるほど一定の関係はあるが、理性を中心に置くのか、それとも信仰を中心に置くのかという点で両者は根本的に区別される。哲学は理性を、宗教は信仰を夫々原理とするからである。この点は明確にしておく必要があるだろう。

ところで、ニーチェは、両親共、代々牧師の家系の出であり、キリスト教の只中で育った。したがってキリスト教を血とし肉としているが、その彼が、キリスト教を批判するのは、客観的かつ第三者的あるいは傍観的な行為ではなくて、自己批判を籠めてなした行為であり、いわば自分で自分を「生体解剖」する苦痛を伴った行為であった。

結論から述べると、ニーチェはキリスト教を否定したが、ジルソンの言うところの、キリスト教の（ネガティブではあるが）影響下に哲学をなした「キリスト教哲学者」の一人であるとすることができないかと思われる。したがって、ニーチェもまた中世哲学の視点から理解することができるのではないかと思われる。

本論

第一節

「七」*Jenseits von Gut und Böse* は「未来の哲学の序曲」という副題を持つニーチェ晩年の著作で、箴言 (Aphorism) 形式によって書かれている。そしてここには「未来の哲学」(Philosophie der Zukunft) が望見されている。ニーチェのいう「未来の哲学」とは果たして如何なるものであるのか。本書の第五二節を軸に、ニ

ーチェが望見していたものの一端を、何らかの仕方で見事に示してみたい。

同書は「高貴とは何か」をテーマとした Aphorism を最終章に、いわば結論として、配している。ここから推測されるように「高貴性」(Vornehmheit) は同書の中心諸概念のひとつである。『ホメロス』に見られるように、「高貴性」は前ソクラテス期における古代ギリシアの価値基準でもあった。

ニーチェはこの観点から第二六〇節において「道徳」に二つの根本類型を区分する。ひとつは「主人道徳」(Herrn-Moral) であり、いまひとつは「奴隷道徳」(Skaven-Moral) である。⁽⁷⁾ 前者は「支配的種族」の間に生じ、後者は「被支配者」の間に生じたとされる。⁽⁸⁾

「八」支配的種族とは価値を創造し (wertheschaffend) 価値を決定する (werthbestimmend) 「高貴な人間」(der vornehme Mensch)、すなわち「貴族的人間」(Aristokraten) を指す。彼らは「真実なる者」(Wahrhaftigen)⁽⁹⁾ 勇敢にして力強き者、尊敬を知る者であるとされる。⁽¹⁰⁾

価値創造は人間が自らの可能性を実現する生の観点ないし場を拓く。その価値はこの世界内に定立され、いわば企投される。そしてかかる価値は相対的となる。したがってこの世界を超越したイデアや神のごとき絶対的な超越的価値は、この世での実現は不可能で、この世において人間には生の可能性を拓かない。したがってまたかかる超越的な価値は現に生きている人間には無意味となる。

この世を超越した絶対的な価値 (神) は、ただ善悪をもって人間を責め裁くのみで、人間の中において人間を励まし人間を生き生きさせる生の原理にはならない。このような価値・神は人間の

心の中ではもはや生きてはいない。その意味で「神は死んだ」、いやむしろ「人間が殺した」と言うことができる¹²。

「九」ところで、被支配者とは、これとは反対に、卑怯者、臆病者、こせこせした者、目先の利益しか考えない者、不自由な視野を持った猜疑心者、卑下慢者、虐待された犬のような人間、乞食染みのお世辞屋、嘘つき¹³、また、抑圧された者、圧迫された者、耐え忍ぶ者、自由のない者、自分自身に確信のない者、疲れた者つまりは「奴隷」「隷従者¹⁴」であるとされる。

「一〇」で、主人道徳には「よこ」(gut)と「まじこ」(schlecht)との価値対立が見られる。この「よい」とは「高貴な」という意味であり、「まずい」とは「軽蔑的な」という意味である¹⁵。ここでは支配者が「よい」の概念を決定し、魂の高揚状態、つまり力Machtの高い状態が価値秩序を決定する¹⁶。

「よい」ものは、充実と溢れ出ようとする力の感情、高い緊張の幸福、贈り与えようと望む富の意識、等である¹⁸。またさらに「よい」者は「自分の内の力強き者」「自分自身を越えた力を持ち、語ることに沈黙することを心得、喜んで自分に対して峻厳Strengと苛酷Erlieを行ない、とりわけ峻厳と厳酷に敬意を表わす者」を尊敬する¹⁹。さらに、彼は「自分自身に対する信念」「自分自身に対する誇り」「無私に対する根本的な敵意と皮肉」「同感や温かい心に対して軽視と用心」を持つ者である²⁰。

ここに魂の高い「力動状態」が「よこ」(gut)とされているのが分かる。これは「力への意志」(Wille zur Macht)の現れと言えるだろう。これに対して「まずい」(schlecht)とは右と反対の特性、つまり力の消耗した状態を指す。

「一一」これに対して、奴隷道徳には「善い」(gut)と「悪い」(böse)との価値対立が見られる。この価値は功利的である。かかる「善」は、苦しんでいる者が生存(Dasein)を楽にするために役立つもの、例えば「同情」「親切な援助の手」「温かい心」「忍耐」「勤勉」「謙虚」「友情」等の尊重を意味する²¹。また「悪」とは右の諸善と反対のものであり、生存が圧迫される危険や恐怖を感じさせるものを指している²²。

「一二」以上から察せられる如く、尊重されるものは、主人道徳と奴隷道徳とは逆の位置にある²⁴。前者が肯定的に認めるものを後者は否認²⁵。後者が肯定的に認めるものを前者は否認する²⁶。両道徳の価値は互いに対角線的にかけ離れている²⁷。それゆえ、ニーチェが望む主人道徳は、「奴隷道徳における善悪の彼岸」に在ることになる²⁸。

そもそも主人道徳は価値を自分で定立する。価値・目的を未来に企投し、それに向かって努力する。ここに「生き生きた」や**beide**「人間の生・存在がある」。

しかし奴隷道徳は価値を自分では定立できず、自分を越えたものに価値を仰ぐ。これは自分以外のものに従属した奴隷の姿であり、ここには「生き生きた」姿は消えている。

これは「力への意志」の現れの差であり、その結果**leben**の生き生きた姿の差となる。この差が右の価値逆転を引き起こしている。

「一三」しかしニーチェは言う。かかる峻厳で力強い主人道徳は今日では失われており、これを追感し発掘し発見することは困難である、今ある近代ヨーロッパの道徳は奴隷道徳に属する²⁹。だが、この世界において、主人道徳は全く無くなっているという

のではなく、両道徳がひとつの文化やひとりの個人において混在しており⁽³⁰⁾、しかも奴隷道徳がむしろ支配を保っている⁽³¹⁾ので、これを逆転させて自己を超克し、主人道徳の支配の到来を待望する⁽³²⁾。

「一四」さて、以上を基礎に、*Jenseits von Gut und Böse* の第三章第五二節を取り上げたい。この短く *Aphorism* にも「未来の哲学」が望見されているからである。この *Aphorism* の最後に、ニーチェは *Vetus Testamentum* を *Novum Testamentum* に結合して一つの *Sacra Scriptura* にしたことを指して「精神に反する罪」と激しく断罪する。一見過激に見えるこの断罪はいったい何を言わんとしているのだろうか。以下、*Sacra Scriptura* を典拠に傍証しながら同節のテキストを解釈して、「未来の哲学」の一端を推測してみたい。

ニーチェは第三章第五二節を次のように説き起こしている（以下、第五二節の引用訳文はゴシック字体）。

ユダヤの『旧約聖書』、その神の正義の書物には人間、事物および説話が、ギリシアやインドの文書もこれに比肩できないほどの偉大な様式において、存在している。人間の昔日の姿を示すこの途方もない遺物の前に人は驚愕と畏怖をもって立つ⁽³⁴⁾。

ニーチェは、古代イスラエル、古代ギリシアおよび古代インドの思想に、他のカ所でも言及しているが、彼はこれらの文書・思想に何らかの仕方で通じていたことが推測される。彼は、これらの三文書・思想を比較したときに、古代イスラエルの文書 (*Vetus Testamentum*) は自余の二文書よりも偉大な様式で人間や物事や説話を物語っていると言う。

ではそれはどの点においてなのか。また *Vetus Testamentum* のどの点が「神の正義」であるのか。また、どの点が「人間の昔日

の姿」であり、何故に「人は驚愕と畏怖をもってその前に立つ」というのか。

以下に、古代イスラエルの文書 *Vetus Testamentum* に即して具体的に、これを推測し、ニーチェの意図を汲み取ってみたい。ただしニーチェ自身が直接、以下の *Sacra Scriptura* のテキストを指摘しているのではない。ニーチェの「生」の視点から筆者が推測して取りあげた。

「一五」まず念頭に浮かぶのは *Vetus Testamentum* の冒頭の *Genesis* である。ここにおける「創造説話」と「族長アブラハムとイサクの説話」の二つを取り上げたい。これらの中に力強い *lebendige* な人間の姿が見られるからである。まずはじめに「創造説話」である。この中で「人間の創造が次のように物語られている。

神は御自分にかたどって人を創造された。……男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる……」(1:27-29)

上のテキストによれば、人間は「神の似姿」、「男と女」、「産み増える者―したがって生きる者―」、「全地と全動物の支配者」として創造され、生きるために「全植物を食料」として与えられた。ここから明らかに人間は「万物の頂点に立つ者」として創造されたことが読み取られる。同時に人間中心思想と、生命に満ちあふれた力動的な世界観も読み取れる。この思想はニーチェのいわゆる「生」*Leben* を中心にした哲学に示唆を与えたことであろう。

「一六」Genesis には創造説話に関して二種類の資料が並存している。³⁶⁾ 右の記事はそのひとつであったが、他にもうひとつの創造説話がある。この説話によれば人間の創造は次のように語られている。

主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。主なる神は東の方のエデンに園を設け、自ら形作った人をそこに置かれた。(G17:8)・・・主なる神は・・・園の中央に、命の木と善悪の知識の木を生えいでさせられた。(G9)・・・主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまふ。」(G2:16-17)

このテキストによれば、人間は土から造られ、「神の息」を吹き込まれて「生きる者」となった。「息」は生 *Leben* を意味する。したがってここに「神は生の源」という思想が読み取られる。これは「万有の根源なる神は生命である」(*Deus est vita*)。とする中世思想の源泉となる。

また、神は人をエデンの園に住まし、園の中央に二本の木を置いた。その一つが「命の木」である。ここにも「生」 *Leben* を中心とした古代イスラエルの思想を読み取ることができる。

「一七」さらに神はこれに並べて「善悪の知識の木」も置いた。ここに「善悪の知識」もまた古代イスラエルの中心にある思想であることがわかる。³⁷⁾ 神は人に「善悪の知識の木の実」を食べることを禁じた。なぜならそれを食べると人は「死ぬ」からである。ここに「生」とその対局にある「死」が登場する。そして、善悪

の知識は「死に至る」危険なものであることが宣明される。

エデンの園における「命の木」と「善悪の知識の木」の二本は、片や「生命」を、片や「善悪の知識」を中心にした古代イスラエルの世界観と人間観を象徴している。同時に、ここには「生命」と「善悪の知識」とは互いに両立することのできない本性であることもまた暗示されている。なぜなら、もし人が両方の実を食べたとしたら、一方では「神と同じように永遠に生き」、³⁸⁾ 他方では「死ぬ」という矛盾事態が生じるからである。

「生」と「善悪の知識」が互いに対立し合い否定し合う本性であるという思想が、古代のこの文書にすでに洞察されていたことは驚嘆に値する。これはニーチェの「生の哲学」に示唆を与えずにはおかなかった思想であろう。

「一八」Genesis はまた言う。

主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を作り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。「・・・これをこそ、女(イシャ)と呼ぼう。まさに、男(イシユ)から取られたものだから。」・・・(G2:18-23)

右のテキストによれば、神は「人に合う助ける者」が必要だと考

え、あらゆる獣、鳥を土から形作り、人のところに持ってきた。そして人にそれらを「名付ける」ことをゆだねた。

「一九」ニーチェの立場から解釈すれば、ここでいう「名付ける」という人の行為は「自分を中心に価値付ける」こと、すなわち「価値を創造する」ことを意味する。人間は自分を中心に据えた遠近法の下にあるからである。

こうして最初の人間は、たんに遠近法下にある主観性だけではなくて、また「価値創造性」をも持っていたと解釈される³⁹⁾。

また、「名付け」は「言葉」による。「言葉」は人と他者を媒介する一種の道具である。この「言葉の思想」は後に見る「媒介者・仲保者ロゴスの思想」につながると思われる。

さらに、人は神が作った動物の中に「自分に合う助ける者」を見つけることはできなかった。そこで神は人のあばら骨から女を作った。そして人はこれに、「イシュ(男)」から取られたから「イシャー(女)」と名付けた。しかしイシュは、墮罪後に、このイシャーに「エバ」というもうひとつの名を付ける。エバは「命」という意味である。ここにも「生」の思想を読み取ることができる。

「二〇」さらに、*Genesis* は「最初の人間」の「墮罪」説話の後に、その「罰」(*poena*)を次のように記している。

神は女に向かって言われた。「お前の孕みの苦しみを大きなものにする。……彼(男)はお前を支配する。」神はアダムに向かって言われた。「……お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。……お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵に過ぎないお前は塵に返る。」アダムは女をエバ(命)と

名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。(3:16-20) (訳文中の○は筆者の補い。以下同様。)

このテキストによれば、神が人に下した最大の罰は「土・塵に返る」という「死」である。死は誰にも等しく人生の最後に訪れる。先に暗示されていた「死」、つまり「生」の対局にある「死」が原罪(*peccatum originale*)の結果、現実化する。

また、この「死」のゆえに、人は個体の「生命の継続」を余儀なくされた。このゆえにアダムは、全人類の母となるイシャーに対して改めて個体としての名「エバ」(「命」)を付けたのである。墮罪後に「命の連鎖」という思想が古代イスラエルの「生の思想」に入り込む。

ニーチェが *Vetus Testamentum* に積極性を認めるひとつの理由は、多分、「死」によって限界付けられるという「峻厳で過酷な」運命に定められながらも、なおこれに屈することなく途絶えることなく受継いでいく生命の力強い姿、ここに生を全肯定する思想を読み取れたからであろう。

Genesis のこの箇所にはニーチェの目指す「生の思想」の発端が認められる。したがって、ニーチェが *Genesis* に「善悪の知」を越えて「生」に積極性を見いだす思想を読み込み、自らの哲学の支えとなしたことは十分に考えられるのである。

「二一」そこでニーチェならこう解釈するであろうという立場から、この失樂園説話を再解釈し、合わせて拙稿の骨組みを述べておこう。

最初の人間は、禁断の「善悪の知識の木の実」を食べる罪に墮した(原罪)。その結果、人間は目が開けて「善悪」を知るようになった。しかし善悪の知は「死」をもたらしした。最初の人間はこうして土・塵に返るといふ身体「死」に定められた。これは

最初の人間が背負った最初の「峻厳で苛酷な運命」である。しかしこの時代の人間はかかる運命に屈することなく、むしろ積極的にこれを引き受けて愛し、神と対座しつつ、命を継いで、本来の「生」に向かって、限られた命を果敢に生きた。これが「高貴な人間」の時代である。(この説話の影響作用は種々の仕方て今日の西洋に迄及んでいる。)

次に、アブラハムに始まる族長時代のユダヤの人々は、神と「契約」(foedus)⁽⁴¹⁾を結んで、その善惡に伏した。彼らは神を契約相手として直接に對した。そこから新たな「死」が生まれた。この「死」は神の前における「精神の死」即ち「絶望」を意味する。しかし、この絶望は「崇高なもの」「神」と対座するところから由来した。Vetus Testamentum 時代の人間は、かかる死・絶望を超えて「生」を回復しなければならぬ第二の「峻厳で苛酷な運命」を背負った。

しかしこの時代の人間もかかる運命に屈することなく、むしろ積極的にこれを引き受けて愛し、神と対座しつつ本来の「生」に向かって、限られた命を果敢に生きた。これも「高貴な人間」の時代である。

「二二」さらに、モーセに始まる律法時代のユダヤの人々は、「十誡」(decem verba)⁽⁴²⁾そして「律法」(leges)⁽⁴³⁾を受け、その「善惡」に伏することになった。そこから新たな「死」が生まれた。この「死」は神の前に律法を順守できない「絶望」を意味する。この時代の人間は律法による死・絶望を超えて「生命」を回復しなければならぬ第三の「峻厳で苛酷な運命」を背負った。律法時代の人間は律法に縛りつかられて次第に「生き生きした」生を失っていく。しかしこの中にもかかる運命に屈することなく、未だ積極的に本来の「生」に向かって、限られた命を生きた英雄は居た。

この限りの律法時代は未だ「高貴な人間」の時代だと考えられる。しかし、この律法時代には、次第に神は人間を超越して、一般の人間から遠ざかった。それは、神と一般人との間に神官階級(アロンの一族)が入ってきたことによる。神官階級は神を独占し、一般人に神を取り次ぐ役目を果たしたからである。これは次第に神と人とを遠ざけ、神をこの世を超越するものとなす効果をもたらしした。

この神は人間を超越し、律法という手段を通じて人間をただ裁くだけの存在となっていく。そこには「生き生きした生」が存在しにくい状況が生まれてきたと言えるであろう。

「二三」Novum Testamentum 時代には、神官に代わって「神と人間の間に仲保者(mediator)」が登場する。そして人々は、仲保者の自らを捧げる「贖罪」によつて「死」に至る律法の善惡から脱出しようとした。

この企ては成功を収めたかのように見えたが、しかしニーチェから見れば失敗であった。仲保者は温情が過ぎたからである。その結果、人間は却つて、安易に流れて力強く生きることを止め、生き生きした心を失い「奴隷・家畜の善惡」に落ちてしまった。

これはもうひとつの新たな「死」つまり「飼ひ殺し」という「絶望」即ち「ニヒリズム」を意味する。この絶望は神との直接的關係を断たれた奴隷、家畜の「虚無」から由来する。これは第四の「峻厳で苛酷な運命」である。これが「奴隷・畜群の人間」の時代である。

「二四」今の人間は、このような死を超えて、「生き生きと力強く生きる」ために、「奴隷的善惡の彼岸」に自らを脱出(exodus ex Aegypto (servo))させなければならない。「今の人間」は

この仲保者を捨て、奴隸的自己を超克することによって原罪(善悪・死・絶望)から「生命」へと回復される。このときには既に仲保者は不要である。仲保者は死んだのである。しかしこの道は険しく苛酷と峻厳に満ちている。これが「超人」(Übermensch)の時代である。

右のニーチェ解釈が許されるならば、*Jenseits von Gut und Böse* は、この回復を試みた救済の書となる。ここに超越神だけでなく仲保者なる神も死んだ「神亡き神学」——未来の哲学——が予想される。
(投稿規定により「二五」以下は続編へ)

- (1) *ibid.*, Drittes Hauptstück : das religiöse Wesen.
- (2) *Genesis*, 3, 22. 主なる神は言われた。「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」
- (3) 後にこれは古代イスラエルの厳しい「律法」(＝善悪の知識)の思想になる。
- (4) この解釈には近代の人間中心主義が現れている。また同時に「人間は価値付ける動物である」とするニーチェの基本思想にも合致する。Nietzsche, *Zur Genealogie der Moral*, II, 8, (S. 322) Vielleicht drückt noch unser Wort „Mensch“ (manas) gerade etwas von diesem Selbstgefühl aus : der Mensch bezeichnete sich als das Wesen, welches Werthe misst, werthet und misst, als das „abschätzende Thier an sich“
なお註を参照。
- (5) 引用訳は日本聖書協会編の新共同訳聖書(一九八八年)による。
(以下同様)
- (6) *ibid.*, IX, 260, (S. 218) ...bis sich mir endlich zwei Grundtypen verriethen, und ein Grundunterschied herausrang. Es giebt Herren-Moral und Sklaven-Moral ;

- (7) Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse*, Neues Hauptstück : was ist vornehm?
- (8) *ibid.*, Die moralischen Werthunterscheidungen sind entweder unter einer herrschenden Art entstanden,...-oder unter den Beherrschten, den Sklaven und Abhängigen jeden Grades.
- (9) *ibid.*, (S. 221) Die Sklaven-Moral ist wesentlich Nützlichkeits-Moral.
- (10) *ibid.*, IX, 260, (S. 218) ... oder unter den Beherrschten, den Sklaven und Abhängigen jeden Grades.
- (11) *ibid.*, ...in's Böse wird die Macht und Gefährlichkeit hinein empfunden, eine gewisse Furchtbarkeit, Feinheit und Stärke, welche die Verachtung nicht aufkommen lässt. Nach der Sklaven-Moral erregt also der „Böse“ Furcht ;
- (12) *ibid.*, (S. 220) Vorname und Tapfere,..., sind am entferntesten von jener (Sklaven-) Moral,...-Die Mächtigen sind es, welche zu ehren verstehen,...引用文中の○は筆者の補足。以下同様。
- (13) *ibid.*, (S. 221) Umgekehrt werden die Eigenschaften hervorgezogen und mit Licht übergossen, welche dazu dienen, Leidenden das Dasein zu erleichtern : hier kommt das Mitleiden, die gefällige hilfreiche Hand, das warme Herz, die Geduld, der Fleiss, die Demuth, die Freundlichkeit zu Ehren-..., denn das sind hier die nützlichsten Eigenschaften und beinahe die einzigen Mittel, den Druck des Daseins auszuhalten.
- (14) *ibid.*, (S. 220) Der vornehme Mensch ehrt in sich den Mächtigen, auch Den, welcher Mächtiger sich selbst hat, der zu reden und zu schweigen versteht, der mit Lust Strenge und Härte gegen sichbt und Erhebung vor allem Strenge und Härte hat.
- (15) *ibid.*, S. 219, Z. 17
- (16) *ibid.*, (S. 220) der Glaube an sich selbst, der Stolz auf sich selbst, eine Grundfreundschaft und Ironie gegen „Selbstlosigkeit“ gehört eben so bestimmt zur vornehmen Moral wie eine leichte Geringachtung und Vor-sicht vor den Mitgeföhlen und dem „warmer Herzen“.

- (17) *ibid.*, S.219, Z.18
- (18) Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse*, (S.219) Verachtet wird der Feige, der Ängstliche, der Kleinliche, der an die enge Nützlichkeit Denkende; ebenso der Misstrauische mit seinem unfreien Blicke, der Sich-Ermiedrigende, die Hunde-Art von Mensch, welche sich mishandeln lässt, der bettelnde Schmeichler, vor Allen der Lügner:
- (19) *ibid.*, (S.221) der Sklaven-Moral Gesetz, dass die Vergewaltigten, Gedrückten, Leidenden, Unfreien, Inner-selbst-Ungewissen und Müden moralisieren:
- (20) *ibid.*, II, 33, (S.48) Es hilft nichts: man muss die Gefühle der Hingebung, der Aufopferung für den Nächsten, die ganze Selbstentäußerungs-Moral erbarungslos zur Rede stellen und vor Gericht führen:
- (21) *ibid.*, (S.221) Der Blick des Sklaven ist abgünstig für die Tugenden des Mächtigen: er hat Skepsis und Misstrauen, er hat Feinheit des Misstrauens gegen alles „Gute“, was dort geht wird--.
- (22) *ibid.*, (S.220) „jenseits von Gut und Böse“
- (23) *op.cit.*, (S.219) In dieser ersten Art Moral der Gegensatz „gut“ und „schlecht“ so viel bedeutet wie „vornehm“ und „verächtlich“:
- (24) *ibid.*, Im ersten Falle, wenn die Herrschenden es sind, die den Begriff „gut“ bestimmen, sind es die erhabenen stolzen Zustände der Seele, welche als das Auszeichnende und die Rangordnung Bestimmende empfunden werden.
- (25) *ibid.*, Im Vordergrund steht das Gefühl der Fülle, der Macht, die überströmen will, das Glück der hohen Spannung, das Bewusstsein eines Reichthums, der schenken und abgeben möchte:
- (26) *ibid.*, (S.221-2) Nach der Sklaven-Moral erregt also der „Böse“ Furcht; nach der Herren-Moral ist es gerade der „Gute“, der Furcht erregt und erregen will.
- (27) *ibid.*, (S.221) Alles das sind typische Merkmale der vornehmen Moral, welche, wie angedeutet, nicht die Moral der „modernen Ideen“ ist und deshalb heute schwer nachzufühlen, auch schwer auszugraben und aufzudecken ist.
- (28) *ibid.*, (S.218) Bei einer Wanderung ... innerhalb Einer Seele.
- (29) *ibid.*, IX, 260, (S.220) Vornehme und Tapfere, ... sind am entferntesten von jener (Sklaven-) Moral, ...
- (30) Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse*, II, 32, (S.47) Sollten wir aber heute nicht bei der Nothwendigkeit ankommen sein, uns nochmalst über eine Umkehrung und Grundverschiebung der Werthe schlüssig zu machen, Dank einer nochmaligen Selbstbesinnung und Vertiefung des Menschen, ... sollten wir nicht an der Schwelle einer Periode stehen, welche, negativ, zunächst als die aussermoralische zu bezeichnen wäre: ... Die Überwindung der Moral, in einem gewissen Verstande sogar die Selbstüberwindung der Moral: mag das der Name für jene lange geheime Arbeit sein, ...
- (31) *ibid.*, III, 52, (S.70) Im jüdischen „alten Testament“, dem Buche von der göttlichen Gerechtigkeit, giebt es Menschen, Dinge und Reden in einem so grossen Stile, dass das griechische und indische Schriftenthum ihm nichts zur Seite zu stellen hat. Man steht mit Schrecken und Ehrfurcht vor diesen ungeheuren Überbleibseln dessen, was der Mensch einstmals war.
- (32) Genesis, 17,7-14, 「・・・わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。・・・わたしは、あなたが滞在しているこのカナンのすべての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる。」神はまた、アブラハムに言われた。「だからあなたも、わたしの契約を守りなさい、あなたも後に続く子孫と、わたしとの間で守るべき契約はこれである。すなわち、あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける。・・・無割礼の男がいたなら、その人は民の間から断たれる。」
- (33) Exodus, 20,1, 神はこれらすべての言葉を告げられた。「わたしは

主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導きだした神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。……殺してはならない。姦淫をしてはならない。……

(34) 例えば、「Exodus」以下は、あなたが彼らに示すべき法である。(21,1) ……人を打って死なせた者は必ず死刑に処せられる。(21,12)」等。

(35) *Deuteronomium*, 4,1, 「イスラエルよ、いま、わたしがあなたがたに教える定めと、おきてとを聞いて、これを行いなさい。そうすれば、あなたがたは生きることができ、あなたがたの先祖の神、主が賜る地にはいつて、それを自分のものにする事ができよう。」この記事によると、人は神の定めと掟を守れば「生きる」しからずんば「死ぬ」ことになる。

(36) Nietzsche, *Also sprach Zarathustra*, I,3, Ich lehne euch denübermenschen. Der Mensch ist Etwas, das überwunden werden soll.

(37) ヤハウェ資料とエロヒム資料である。関根正雄『イスラエル宗教文化史』(岩波全書、一九五二)

(38) *ibid.*, Drittes hauptstück : das religiöse Wesen

(39) 渡邊二郎監修『西洋哲学史の再構築に向けて』(昭和堂、2000) 第5章参照

(40) Nietzsche, *Die frühe Wissenschaft*, S.158 seqq.

(41) 第一七回哲学史研究についての見解を発表(平成一四年二月)。

(42) Augustinus, *De trinitate*, I, VIII seqq.(43) Gilson Étienne, *L'esprit de la philosophie médiévale*(1943), p.2, ...des philosophes chrétiens.

(44) Nietzsche, Friedrich, *Jenseits von Gut und Böse, Vorspiel einer Philosophie der Zukunft*(1885/6), Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe, Herausgegeben von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Sechste Abtheilung, Zweiter Band, Walter de Gruyter & Co, Berlin 1968

(1) による研究結果である。関係各位には心より感謝申しあげる。

【追記】 本稿は平成一一年度から一四年度の科学研究費補助金B